

INTERKIDS
INTERNATIONAL KIDS FORUM OKAYAMA

国際塾

世界を知る を学ぶ

インターキッズ
国際塾
講義集

私の世界観

講師：大原 謙 一 郎

先ほど、私のことをいろいろとご紹介いただきましたけども、40年前の高校生だと思ってください。高校生時代は、今思い出すとそうとう気恥ずかしいことがたくさんあったけれど、いいものですね。

皆さんにお聞きしますが、これから理科系に進みたいと思っている人は？ 結構いらっしゃるのですね。

じつは理科系の方が多いというのは嬉しいです。

2ヶ月ぐらい前、高校生の物理のオリンピックのような催しが岡山で開かれたのをご存知ですか。全国から高校生がたくさん集まってきたんですけども、その高校生たちがみんな大原美術館に来てくれたんです。

その時に、理科系に限らず、芸術系でも文化系でも何系でもだけれども、上手な人になるのか、クリエイティブな人になるのか、両方なのか、これを考えながら自分のキャリアを創ってくださいとお話しました。

私は以前、「クラレ」という会社にいました。「クラレ」は「倉敷レーヨン」という繊維会社だったのだけれども、今は布を織る繊維ではなくてコンクリートに混ぜるビニロン繊維を作っています。セメントは、そのままではパサパサで粘りがないんです。その中に繊維を混ぜ入れ、お互いを繋ぎ合わせて力を強くしているんですね。これまでは、繊維状の物はアスベストが使われていたんですけども、現在はアスベストに替わるものとしてビニロンが使われるようになりました。セメントはアルカリ性で、ビニロンはアルカリに強い性質を持っており、コンクリートに混ぜて補強してやると非常にいい物ができます。「クラレ」でそういうことを発見、開発してビニロン繊維を生産してきました。この製造を始めてもう何年にもなりますが、増産するために先日、岡山の工場を増設しました。

コンクリートにビニロンが使われているというようなことをみなさんご存知でしたか？ 驚くようなところに驚く物が使われてますでしょう。で、そのビニロンの原料は、ポバールという化合物なんだけれど、その少し前の段階で、エバールというフィルムができるんで、それを混ぜてやるんです。が、そのフィルムがまたびっくりするようなことがあるんです。このフィルムは酸素を通さ

ないんです。フィルムって酸素を通さないのが当たり前と思っているかもしれないけれど、実は、かなり酸素を通します。ペットボトルもそのままでは、酸素がけっこの中に入ってきます。エバールというフィルムで包んであげると酸素が入らない、酸化しないので味が変わらないんですね。また、カツオ節のパックもこのフィルムが使われています。このパックも岡山工場で作っています。

布を織るビニロン繊維から、ぽーんと飛躍して何かを思いついて実現していく。そのぽーんと飛躍するところはクリエイティブな人がやる。でも、ぽーんと思いついた製品を工場できっちりと仕上げていくところは上手な技術者がやるんです。

たとえば実験室で、同じビーカーに、同じ薬を入れて同じように熱しても、きれいな結晶を作る人もいれば、なん度やっても乳濁液しかできない人もいます。そして、この結晶にX線を当てるとすごくきれいな光が出るというようなことを思いついて、それを新しいレーザー・ディスプレイに結び付けた、そういうことができる人がいます。

それで、物理のオリンピックに来た高校生の人たちに、「絵を見てください」と言ったのは、そういうクリエイティブなことのできる人は、かならず理科ばかりを勉強した人ではないからなんです。

倉敷民芸館館長の安井昭夫さんは民芸館の館長になる前は、クラレで新しい製品をたくさん思いついて作り出していた、ものすごくクリエイティブな人です。京都大学の理学博士で、触媒化学の世界的な権威者です。この人もしょっちゅう絵を見たり、専門以外の本を読んだり、山に登ったりされています。5月の連休中に春山スキーをやって、強い紫外線でぼろぼろに焼けた顔をして会社に出て来るような人です。

安井さんのライバルで、今、旭化成で研究開発をしている人はフルートの名手です。それからもう一人、今ケミカル・エンジニアリングの新しい会社を作っている人がいるんですけども、この人はオペラの権威者です。ぼくが

知っている非常にクリエイティブな人は、美術とか芸術とかに必ず触れて、専門の仕事に別の発想をいつも取り入れています。ですから、みなさん、理科系の方も芸術系の方も文化系の方にも、そういうことを考えておいていただきたいと思います。

『なまこ壁とエルグレコ』を眺めてみる

1. 21世紀は文化の時代

倉敷の「なまこ壁」とエルグレコの「受胎告知」、この2つが似合っているのか、この町でちゃんと出会っているのかということをこれから考えていきたいと思います。

21世紀は、20世紀の物質文明を卒業して心豊かな文化が成立する世紀、「21世紀は文化の世紀」と世界の人が考えたのです。でも、21世紀に入ってたった9ヶ月経ったとき、アメリカで「9.11」の事件が起きました。「9.11」って何だったのかというと、当時のアメリカ大統領のブッシュさんが言っているような「悪いやつが爆弾持ってやってきた」というような単純な話ではないですね。この地球が直面しているいろんな矛盾が、最悪の形で現れてしまったのです。そういう事件だと考えなきゃいけないと思うんです。

一つは、地球環境の限界ということです。地球はどこまで耐えられるかという大きな問題がここに入っているんです。

その一つが、世界的な貧富の差の拡大です。これまでの貧しい国がだんだんお金持ちになり、アメリカとか日本並みに物の消費を増やすという形になってきたら、それだけで地球環境はパンクしてしまうでしょう。日本もアメリカも、まず先進国が我慢しなくちゃいけない。それが京都議定書の考え方ですね。

また、これまで貧しかった国が豊かになってCO₂だけではないですね、いろんなものを排出しはじめた。おれたちは我慢しているのにインドや中国などが我慢しないのはけしからん、俺たちも我慢しないよ、というようなロジックではこれからの地球は保てないでしょう？ だから、おたがいに我慢をしあう関係をこれから作っていかないといけない。

貧富の差だけではなくて、人口の増大もあります。今地球の人口は60億人です。まもなく90億人になる。95億人ぐらいで頭打ちになるという説もあるんだけど、ほんとにどうなるか分からない。そういう世界

を、みなさんは生きぬいていかなければならないわけですね。地球が限界に来ているのでこれからは「値打のある人だけで」という考えで生き延びていこうとしたらそれは最低の考えです。歩み寄って、我慢しあおうじゃないのという方向で考えていきたい。仮にそういうことを考える時が来た時に日本の国はそう考えるサークルの中にいたい。そうでしょう？ そういう日のために“文化”は働かなければいけないんです。

2000年に、アメリカのコロラド州のアспенというところにあるノースアспен研究所で、「グローバリゼーション」をテーマにしたシンポジウムがありました。3日間のシンポジウムでしたが、私も参加しました。アメリカの元大統領の1人や、軍需産業の副社長とか、グローバリゼーションでしっかり稼いでいる人達が来ていました。逆にそれじゃまずいねと言っているメアリーロビンソンという元アイルランド共和国の大統領で、当時国連の人権担当の高等弁務官になられている方も来ていました。アメリカに対して非常に強く反対の立場をとる人です。

横道にそれますが、国連の高等弁務官は一国の大統領を務めたような人になるポジションなんですね。日本の緒方貞子さんが高等弁務官を務められましたが、これはすごいことなんですね。メアリーロビンソンさんはもちろん女性です。女性が世界でものすごく活躍されている事も注意しておいてほしいですね。

このような人達とアメリカの利害を代表する人達と真つ向勝負のディスカッションをやり、すごく面白かったんですが、その最初と最後にセッションがあり、最初のセッションは宗教がテーマ、最後のセッションは文化でした。

宗教のセッションでは、壇上にイスラム教、儒教、ヒンズー教、仏教、キリスト教はカソリック、プロテスタント両方が並び、この難しい世の中に対して宗教者は何ができるのか、それぞれの考えが述べられていました。

最後の文化のセッションの壇上には、ハーバード大学の美学の教授のスカリーさんという、ナショナルギャラリーの前会長さんも出ておられました。国によって美しいとか、尊いとか、大事だと思うものは違います。食べ物一つとってもそうですね。ある国では羊の肉はいいけど豚はだめだとか、同じ羊でも殺し方によって食べていいとか悪いとか。真のグローバリゼーションは、そういう、習慣や文化がすごく違うことをお互いに理解し合わないといけない、同じ色に塗りつぶしちゃだめなんで、

社会とか経済、法律とか外交とか、あるいは軍事力で解決できる問題ではないだろう、21世紀だからこそ文化が働かなければいけないということが話されたんですね。

2. 国際理解はまず自分の国の理解から

私たち大原美術館は多文化理解の装置で、質の良い日本と世界の出会いの場でありたいといつも思って、世界に発信しています。

矢代幸雄さんという美術史家がいまして。明治生まれの方ですが、東京芸術大学でずっと教えておられて、最後は奈良の大和文化館の初代館長になられた方です。この方はイタリアルネッサンスの時期に活躍していたボッチェリの研究で世界に名を馳せた人です。

矢代先生はイタリアに行ってボッチェリやミケランジェロを研究して日本に帰られると、すぐ、奈良に行きヨーロッパのいろんなものを見てきた同じ目で、興福寺の阿修羅像を見ます。あるいは新薬師寺の十二神像を見ます。ローマのサンピエトロ大聖堂を見てきた目で唐招提寺を見ます。あるいは薬師寺の塔を見ます。そういうことをやって自分の原点をもう一度しっかりと見直し、それからボッチェリの研究をやるんだと言われていたんです。国際理解は、そういうことなんですね。向こうのことがわかればいいということじゃなくて、自分の国の文化、自分のことをもう一回しっかりと見直すことが必要なんです。

そういう姿勢を持たれた矢代先生は、昭和10年代の初め、満州事変が起きた時にボストンに住んでおられたんです。その時、ボストン美術館には「吉備大臣入唐絵巻」が展示されていました。これは岡山に関係ありますね。吉備大臣(おとど)は吉備真備のことです。吉備真備が唐に入るときの様子を描いた、すばらしい絵巻物で、源氏物語絵巻に並ぶものです。

日本に対する眼差しがものすごく厳しい時だったので、この絵巻物をアメリカ人がどう見てくれるか心配だった矢代先生は、もういてもたってもいられなくて美術館に行かれたそうです。そうしたら、美術館に来ているアメリカ人がこの絵巻物を、「この表現は!」「この色彩は!」と感嘆しているんですね。そして、「今から1000年も前にこんなものを作った日本人って素晴らしい!」と、誉めそやしてくれていたんです。これを見て矢代先生は、「この一巻の巻物が、アメリカの地で日本のために友人

を作ってくれている。そのことに私は胸が詰まる思いだ」と、言われているんです。でもこの絵巻物が作ってくれた友人たちは第2次世界大戦を止めることはできませんでした。文化は決して万能ではないのです。止めることはできなかったけれども、少なくともそういう友人たちがいたから、京都、奈良は焼き払われずにすんだ。あるいは倉敷もそうかもしれませんね。

また、フランスのパリも戦火を免れた都市です。パリにはたくさんの美術館がありますが、中にはヨーロッパの芸術家の作品を収蔵・展示しているだけでなく、非ヨーロッパ世界の民族芸術だけを展示することを目的とした美術館もあります。そして、我々はキリスト教世界に閉じこもっていない、非ヨーロッパ世界の伝統や民族美術を理解しようとしている、大事にしている、パリは「人類の宝」ですよといった情報発信をすごくしています。ヒトラーがパリから撤退するときに「焼き払え」と命令したのですが、人類の宝物が詰まっている都市を焼き払うことはできなだろうと、免れたのですね。

3. 日本人の目を通して選ぶ

そういうことを考える材料の一つとして、このエル・グレコの「受胎告知」と「なまこ壁」の2つが倉敷の町で調和しているんだろうか、あるいは響きあっているんだろうかということを考えていきましょう。



今、倉敷の町を見ていただいています。倉敷は商人の町です。商人はある意味自分勝手ですが、クリエイティブ、いろんなものがどんどん出てくるのです。

日本は町の生い立ちによって作り出すものが違います。岡山と倉敷でも違いますね。岡山は36万石の池田家の城下町で、閑谷学校を作って市民にも教育をほどこした名君池田光政がいました。その名君を支え、大きな仕事

をしてきたのが津田永忠などの家臣でした。

備中は岡山とは違って、倉敷は天領でしたが、5万石です。岡山の6分の1にもなりません。でも備中地域では5万石というのは大きい方です。今の高梁市、松山藩は3万石ですね。高梁市に合併した成羽は成羽藩だったんですね。備中はそんな小さな藩がたくさんあって、中心になる地域がなかったのです。

倉敷は、旧倉敷、玉島、水島、児島地域があって、今度新しく真備町と船穂町が合併して倉敷市になりましたけれども、真備町とか船穂町を旧倉敷のカラーで塗りつぶしては絶対いけないと私は思っています。それぞれの町の特徴を伸ばしていくことを旧倉敷は考えなければいけない。そして、これが日本中の合言葉にならなくてはならないと思いますね。



● 大原美術館：丸窓

大原美術館の真ん中に窓があります。窓から「なまこ壁」の商人の町が見えます。中に入った入り口に近いところに、児島虎次郎の「和服を着たベルギーの少女」がいつも展示してあります。



● 児島虎次郎：
「和服を着たベルギーの少女」

児島虎次郎は成羽の人で、大原美術館に収蔵してあるコレクションを最初を選びとった人です。

児島虎次郎は東京美術学校(現東京芸術大学)を卒業後、大原孫三郎の支援を受けて、ベルギーで勉強しました。ここで大事なのは、児島はベルギーで勉強しながら日本人のアイデンティティを決して忘れなかったことです。だからこの絵を窓の外の日本の商人の町とその後ろにある世界の美術への橋渡しとしていつも置いているのです。

この絵、「なさけの庭」は児島がヨーロッパに行く前に描いた作品です。「里の水車」もそうです。



● 児島虎次郎：「里の水車」

ヨーロッパに行くようになります(「ベゴニアの畠」)。



● 児島虎次郎：「ベゴニアの畠」

「里の水車」は水車小屋で静かに憩っている親子、後ろから柔らかい光が射しています。生活の中にある一場面を描きながら、そこに生きている生活者に対するとても優しい眼差しがあります。「ベゴニアの畠」も同じ。おばあさんと子ども、そして木靴が手前に脱ぎ捨ててある。生活の中にある一場面を切り取って、それに対する優しい眼差しをもって描いている。2つの絵の原点はまったく変わってないけれども、スタイルはこんなに変わってしまっている。

したがって、児島はベルギーに留学して、日本人として

のアイデンティティについて悩むわけです。そして悩んだあげくに、この作品（「秋」）を仕上げ、これをフランス、パリの国民美術協会に送り、金賞をとり、日本人として初めてフランスの国民美術協会の正会員になります。この絵は今、パリのポンピドー美術館の所蔵になっています。そうして児島は日本人のアイデンティティと自信を取り戻し、再びヨーロッパに行き、日本人の目を通して見た世界を描き、日本人の目で世界の絵画を選び始めるのです。



● 児島虎次郎：「秋」

窓の内には世界の美術作品がある。そのうちの一枚に児島が選んだエル・グレコの「受胎告知」があります。



● エル・グレコ：「受胎告知」

エル・グレコはギリシャ人です。彼はイタリアのベネチアで修行した後に、スペインのトレドで活動した人です。トレドという町は、首都マドリッドの南に位置しています。スペインには、ピレネー山脈を越えてキリスト教文化が入ってくる。また、アフリカを通じてイスラムの文化が入り、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の文化が交錯した地域です。みなさんがイタリアのベネチアに行く機会があったら、是非サンマルコ寺院に入って、椅子に座って周りをゆっくり見てください。周り中にモザイクがあります。キリスト教会なんだけれども、イスラムの香りをしっかりと持っています。エルグレコもベネチアで少し勉強した後にトレドに行ったんですね。

異文化と異文明が混じりあっていた町に、異邦人であるギリシャ人のエルグレコが居たのです。そういったエル・グレコの存在の仕方に、児島が非常に深い感銘を受け、この絵を選んだんですね。児島自身が多文化理解の装置だったという感じです。

4. 大原美術館が選んだ作品

大原美術館館長の高階秀爾は、この絵は数点あるモネの「睡蓮」中でも出色のものだと言っています。光がすーっと外から入ってきて、外にある木とか雲とか空がこの水面に写って、私たちのところに迫ってきます。この絵は、特に私たち日本人に一番ぴったりくる「睡蓮」だと思います。



● クロード・モネ：「睡蓮」

キリスト教の宗教画はどうも厳しい、または疲れると日本人はよく言いますが、そういう人たちにとって、ゴッヤンの「かぐわしき大地」は、中にこもっている優しさのようなものを取りだしている一品だと思っていただけるでしょうか。

ピカソの「頭蓋骨のある静物」です。



●パブロ・ピカソ:「頭蓋骨のある静物」

これは1942年に描かれています。ということはナチスに占領されていたパリで描いている。ピカソはその前に「ゲルニカ」という作品を描いていますが、これはスペインのファシストに対する抗議の気持ちがこもった絵ですね。ですからナチスにとってピカソは大変な危険人物であったわけで、ピカソはひっそり隠れながらも、当時一緒にレジスタンスを戦っている仲間たちに対して強いメッセージを送っていたのです。窓から射す光の中に白い花がすっと立っている。この花の白さ、その背後には多くの犠牲があったかもしれない。あの花を目指して戦うというレジスタンスの人たちに対する強いメッセージが表れています。現代の作家、フォンタナやポロックの作品もあります。と同時に、日本人の作家、安井曾太郎、梅原龍三郎の絵もあります。安井曾太郎は東洋のセザンヌ、梅原龍三郎は日本のルノアールなんて言われていますけれども、彼らの作品は、絶対セザンヌやルノアールの真似ではないです。西洋の美術をしっかりと勉強しながら日本の心を描いた人たちです。日本の姿を描きながら世界と繋がっている、こういう繋がり方をしたいと児島も思ったのです。

生活と文化、生活と美しいものとが一緒に混じりあっている、そういう姿を実現しようとしているのが民芸の世界の方たちです。河合寛次郎や棟方志功は、彼らの作品を通して世界にすごく大きなメッセージを出している。棟方志功の展覧会を一昨年、パリとローマでやりました。こういう人たちの作品を通じて世界と分かりあいたいというのが私たちのメッセージです。

これまで話してきて、美術館は一生懸命働いているということを少し感じて頂けましたでしょうか。

そして、プロフェッショナルが町に出て行くということも、ものすごく大事なんですね。大原美術館でも、有隣荘で現代美術の有望な若い作家3人展をやりました。また、全国の高校生の作品を募集して特賞とか大賞を決め、それを大原美術館に展示するようなこともやっています。夏にはチルドレンサマーミュージアムを企画して、彫刻と一緒に身体表現をやってみる、日ごろ触ることができない彫刻に触ってみるとかといったように、文化を町に出していくこともやっています。

そうすることによって新しいクリエイションが生まれます。日本中いろんなところでそういうクリエイションが興ってくるようになるんです。

事業で言えば今ちょっとあやしくなってきたけれど、日本の代表的な産業は自動車産業ですね。マツダは広島がクリエイトした仕事でしょ。ダイハツは大阪、トヨタは愛知県豊田市、ホンダは浜松。日本中でそういった物を作っています。倉敷レーヨンも倉敷で生まれ育った会社ですが、ライバルの東レは滋賀。旭化成は延岡。帝人は米沢です。

ブリジストンは福岡県の久留米市です。東京にブリジストン美術館がありますが、あれは石橋正二郎さんという方がお作りになったのです。ブリジストン美術館の母体になっている石橋文化財団は今でも久留米にあります。クリエイトしたものが東京に出て花開いているのです。本当ならばブリジストン美術館は久留米にあるべきでしょうね。松方コレクションが東京上野の国立西洋美術館になっていますが、松方さんは神戸の企業家ですから、神戸に作るべきだったんじゃないかなと私は思います。

絵描きでは、児島が学んだ黒田清輝は鹿児島出身です。青木繁は久留米、安井曾太郎と梅原龍三郎は京都です。国吉康雄や坂田一男は岡山、関根正二は福島、棟方志功は青森、といったように、鹿児島でも、久留米でも、東京だけでなく、地方に非常にクリエイティブな絵描きや経営者がたくさんいます。

というお話しをしてきましたが、なまこ壁とエルグレコの「受胎告知」は似合っているでしょうか？

もう一度、世界と日本の質のよい出会いを眺めながら考えていただきたいと思います。

講師略歴

大原謙一郎 OHARA Kenichiro



実業家、(財)大原美術館理事長。兵庫県生まれ。エール大学大学院博士課程修了。現在、倉敷商工会議所会頭、倉敷芸術科学大学閣員教授、倉敷コンサート顧問、FMくらしきの番組「音楽図書室ーくらしきコンサートゆかりのアーティストたち」を担当。著書に『倉敷からはこう見えるー世界と文化と地方について』『芸術都市の創造ー京都とフィレンツェの対話』などがある。